

審査の結果の要旨

氏名 バーリー アンドリュー

日本の近世建築はモダニズムが標榜する建築と似たところが多いゆえに、内外の論者によって特質が研究されてきた。また、それを支えた空間概念、例えば「間」についてもある種のエキゾチシズムを含みながらも議論されてきた。しかし、これまでの日本の空間に関する理論は曖昧なことが多かったことは否めない。

申請者は、「個人、集団、もしくはある文化における空間の認識は、彼らが描いた空間の表現方法に反映されている」・・・「言い換えれば、人間は空間を捉えたのと同じようにそれを描写する」という仮説を前提として、二種類の江戸時代の図像に着目する。それは、地図と建築の図面である。これらの図像は、絵画のように芸術としては見なされてこなかったもので、時代精神や地域文化が反映しているものとしては扱われてこなかった。特に建築図面は、実用的図像として機能性の観点から見られることが多かった。申請者は、それらを文化的表象として捉えている。

最初に近世の地図が考察の対象とされる。地図には地図製作者の自然風景や都市風景に対する考え方が表れているとする。当然のことながら、西洋文化を背景にもつ申請者は、実際の地形との対応において正確で、整合的な表現を目指す西洋の地図の表記法との比較が念頭に置いて、日本の地図の表記法の特徴を分析している。即ち、町と町との間の地理的位置関係を示すはずの交通のネットワークが歪曲されているタイプ、ひとつひとつの集落を「豆（地名を小判型の囲んだもの）」のような形で表現し、「豆」同士をつなぐ道路交通のネットワークを無視しているタイプ、当然道路交通のネットワークを強調して描かれているが、ランドスケープの地理的關係は地図のデザインに合うように変形されている旅行用の地図に見られるタイプなどである。

申請者は、これらの日本の近世の地図に共通して見られる、現実の空間関係を無視し単純な場所の連鎖に還元する態度の内に、井上充夫氏が江戸時代の建築の特質として述べている位相幾何学的な「行動空間」との類似性を認めている。

申請者はまた、日本の地図の描写の特徴として、建築や山などを絵画的要素として抽象的平面の中に挿入し、しかも地図上の重要な位置から見た立面で描かれていることに着目し、これを、「平面の中に折りたたまれて」と表現している。これは、「見

る人」の、「見られる物」に対する相対的な位置関係を重要視する態度の表れとしている。

続いて、近世の建築図面が考察の対象とされる。近世の建設組織では、設計と施工が未分化であり、棟梁が両者を兼ねていたことから、図面表現は一般的に単純であるが、

「浅い空間の中の二次元の面の集合」という特徴を持っていることを指摘している。

地図の表記法で発見された「折り畳み」が、建築図面にも基本的な性格として現れている。例えば、平面図のなかに立面図が同時に描き込まれている、寺院の伽藍の配置図に立面図がバラバラの方向に描かれているなどである。この状況を「一つの図面の中で視点がたくさんあるために、ひとつの絵画的な空間は分解され、いくつかの曖昧な関係性を持つ空間の連なりとなる」と表現している。

申請者は、建築図面の考察に続いて、日本の建築模型と図面の両義性をもった、極めて独特である「起こし絵図」について考察している。起こし絵図は、申請者の言う「折り畳み」がそのまま現実化したものである。起こし絵図は近世建築の構成要素の平面性や、その軽量性を強調し、西欧的な感覚では移動不可能な建築までもが軽量で、移動可能であるというような印象をもたらしている。また、起こし絵図の出現は単に建築の設計の道具の改善である以上に近世初期に起こった建築概念の転換と連動したものであるとも指摘している。

このように申請者は、第1に、これまで実用物として見られてきた地図の表記法と建築図面を文化的表象として再定義し、第二に、別々のものとして見られてきた二つを空間表象として同時に観察することによって、日本の近世の空間概念の輪郭を実証的に示すことに成功している。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。